

2014. 12

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』補論 清水 有子 ... 1

〈論文〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... ニダ・T. クエバス ... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... 方 真 真 ... 33

メノアメリカ考古学における日本人研究者
..... 市 川 彰 ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
..... 嘉幡茂／村上達也／フリエタ・M.= ロペス・J.／
..... ホセ・ファン＝チャベス・V. ... 73

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦(前編)
..... 小 林 致 広 ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... マリア・デ・デウス・ペイテス・マンソ／ルシオ・デ・ソウザ ... 121

16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察
..... 立 岩 礼 子 ... 133

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか
—経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える
..... 高 橋 慶 介 ... 151

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014夏期調査」—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—
..... 辻 豊 治／南 博 史 ... 161

No.

14

〈ARTÍCULO INVITADO〉

A supplement of *Kinsei nihon to Luzon*..... Yuko Shimizu ... 1

〈ARTÍCULOS〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... Nida T. Cuevas... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII Chenchen Fang ... 33

Japanese Scholars in Mesoamerican Archaeology Akira Ichikawa ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
Shigeru Kabata/Tatsuya Murakami/
..... Julieta M. López J./José Juan Chávez V. ... 73

Los desafíos de la justicia alternativa por la CRAC-PC de La Costa-Montaña de Guerrero,
México (Primera parte) Munehiro Kobayashi ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol
dos séculos XVI e XVII. Maria de Deus Beites Manso/Lúcio de Sousa ... 121

El Realejo y sus condiciones como el puerto próspero durante el siglo XVI
..... Reiko Tateiwa ... 133

〈NOTA Y COMENTARIOS〉

Facing the contingency of life in the overflow of drugs:
Rethinking the legalization of drugs and economic growth in Brazil
..... Keisuke Takahashi ... 151

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN〉

Informe sobre la investigación académica de Nicaragua [Investigación de verano, 2014]
—para estudios del área cultural del Mar Mediterráneo Americano—
..... Toyoharu Tsuji/Hiroshi Minami ... 161

〈論文〉

メソアメリカ考古学における日本人研究者

市川 彰

キーワード

メソアメリカ, 考古学, 日本人研究者, 文献, 動向分析

Abstract

In this paper I will review comprehensively the history of Japanese scholars in Mesoamerican archaeology, reflecting on its future. Based on the overview of the history of Japanese scholars in Mesoamerican archaeology and a trend analysis on the quantity of research papers written by them, I am able to mention the following characteristics: (1) Japanese scholars have participated or directed archaeological investigation in Mesoamerica since the 1970's. (2) Many Japanese scholars have currently carried out their own archaeological projects in various sites of Mesoamerican civilizations on a variety of research topics. Some of these studies are highly valued in the academic world. (3) The above mentioned characteristics are not well known in Japanese society.

By reflecting on these issues, I have two important suggestions: we need to reinforce our network between Japanese scholars and we have to carry out more outreach activities towards the Japanese society.

はじめに

本稿は、2014年11月24日に京都外国語大学で開催された国際シンポジウム『メソアメリカ考古学研究とその展望～次世代を担う日本人研究者たち』（以下、京外大シンポ）で口頭発表した内容と拙稿（市川2012a）を土台とし、加筆修正のうえ、作成したものである。

近年、日本人研究者が古代メソアメリカ文明の栄えた地で考古学調査をする件数が増加している。京外大シンポが若手・中堅研究者を中心に多様なテーマのもとで開催されたことは、日本人によるメソアメリカ考古学研究の裾野が確実に広がっていることに他ならない。しかし一方で、研究者が増加し、学会のさまざまな試みがあるものの、日本では学術的にも社会的にも古代メソアメリカ文明についてあまり良く知られていないのが現状といえよう。この点については、先駆的功績を評価しつつ、国内において次世代を担う研究者育成や古代メソアメリカ文明に関する正確な情報を発信していく役目のあるわれわれは十分に認識しておく必要がある。

以下、本稿では日本国内の状況に焦点をあて、メソアメリカ考古学をとりまく現状と課題について述べる。

1. 本稿の目的

本稿の目的は2つある。第一に、これまでの日本人研究者によるメソアメリカ考古学研究を網羅的に紹介し、日本人が執筆した文献の動向分析を通じて、研究の動向とその現在地を把握することである。そして、第二に、研究の現在地を確認したうえで、日本におけるメソアメリカ考古学の今後の課題を明確にすることである。

これまでも学史の整理がなかったわけではない。たとえば、日本考古学協会が発行している『日本考古学年報』では研究動向が多数の論文や著書とともに数年ごとに紹介され (e.g. 青山 2009), その他にも代表的な個別事例の紹介や自伝的著書もある (e.g. Aoyama 2002; 桜井 2004; 杉山 2012)。しかしながら近年本格的に独自の発掘調査を実施している若手・中堅研究者らの動向に限って言えば、未だ邦文では積極的に紹介されていない。そこで、本稿では、最近の動向も含め可能な限り広くメソアメリカ考古学における日本人研究者の活動を渉猟する。くわえて定量的な文献の動向分析をおこない、現在に至るまでの学史を整理し、研究の流れを次世代に繋げていくための今後の課題について考えてみたい。

2. メソアメリカ考古学史における日本人研究者

本節では、これまで日本人が過去に主体となり実施した、あるいは現在進行形の調査研究を紹介し、メソアメリカ考古学における日本人研究者の動向について概述する (図 1)。



図 1 日本人研究者が調査対象としている主な地域や遺跡

「メソアメリカ」とは、メキシコ北部から、ベリーズ、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグアとコスタリカの一部の領域をさすが、以下では北から南に順にこれまでの動向について概述する。なお、本稿で登場する人物名については敬称略とさせていただきます。はじめに断っておきたい。また、引用文献については邦文文献を中心に比較的入手が容易なものをあげている点もはじめに明示しておく。

2-1. メキシコ

(1) メキシコ西部

ハリスコ州、ナヤリト州、コリマ州、ミチョアカン州などが位置するメキシコ西部地方は、先古典期には円形ピラミッドや堅坑墓で有名なテウチトラン (Teuchitlán) 伝統が栄え、後古典期にはタラスコ王国 (Tarasco) などが興隆した地域である。また、メソアメリカでは冶金技術が発達した数少ない地域でもあり、南米アンデス地域との関連が指摘されている地域である。

このメキシコ西部では大井邦明が1978～1979年にティンガニオ (Tinganio) 遺跡の調査に関わっている (大井 1985a, 2007)。調査では、テオティワカン様式のタルー・タブレロ (Talud-Tablero) 建造物をはじめ、球技場、50体もの人骨が納められた地下式墓などが発見されている。

近年では吉田晃章 (東海大学) が、埋葬文化に着目し中米メソアメリカ文明と南米アンデス文明の文明間の交流について研究をおこなっている (吉田 2014)。

(2) メキシコ中央高原

メキシコ中央高原における考古学研究はテオティワカンやテンプロ・マヨールの調査研究がよく知られている。このメキシコ中央高原では、日本人研究者が本格的に渡墨するようになった1960年代後半以降から現在に至るまで、さまざまな調査研究に日本人が主体的に関わっている。

まず、杉浦洋 (メキシコ国立自治大学 Universidad Nacional Autónoma de México = 以下 UNAM) は、1960年代後半からメキシコ州トルーカ盆地の調査などを継続している。当該地域の古典期終末期の諸問題や生業論をはじめとして多数の論文や著書などがある (e.g. Sugiura 2005, 2009; Sugiura et al. 1998)。

大井は1970年代前半にメキシコ州に所在するテオテナンゴ (Teotenango) 遺跡の発掘調査に主体的にかかわり、文献学や民族学などを取り入れ、当該地域の新たな歴史の再構築に尽力した (大井 1985a, 1985b)。また重要なことは、大井はメキシコ考古学の巨星ロマン・ピニャ・チャン (Román Piña Chan) に師事し、発掘調査だけではなく、遺跡の修復や保存活動、成果を地域に還元することを重視するメキシコ考古学の理念を紹介している点であろう (e.g. 大井 2006)。

杉山三郎 (愛知県立大学) は、世界的に有名なテオティワカン遺跡の調査に1980年代から従事し、羽毛の生えた蛇神殿、月のピラミッド、太陽のピラミッドといったように重要な公共建造物の調査を実施し、テオティワカン国家の宗教や世界観、政治形態、都市計画に関する顕著な成果を挙げている (e.g. 杉山 2001; Sugiyama 2005)。さらに、アステカの都であったテンプロ・マヨール遺跡の調査にも関わっている (杉山 2007)。アステカについては井関睦美 (明治大学) も図像や遺物分析をおこなっている (e.g. 井関 2011)。

2000年代にはいり、日本人研究者によるメキシコ中央高原の考古学研究は若手研究者の台頭が目立つ。嘉幡茂は、調査研究が一極集中するテオティワカンからやや距離を置きながら、その周

縁に位置する社会の研究や、歴史性すなわち通時的視点から初期国家の形成過程の理解に資する研究をおこなっている (e.g. 嘉幡 2008, 2013; 嘉幡他 2014)。現在、嘉幡はラス・アメリカス・プエブラ大学 (Universidad de Las Américas Puebla) に所属し、とくにテオティワカン国家に先行する大センターであったプエブラ州のトラランカレカ (Tlalancaleca) 遺跡で考古学プロジェクトを遂行している。

村上達也は、テオティワカンにおける公共建造物の建築活動とそれに関わる権力の多次元性に着目した研究、理化学分析から漆喰の技術変化と社会動態に関する研究などをおこなっている (e.g. Murakami 2010; Murakami et al. 2012)。現在はアメリカのトゥレーン (Tulane) 大学に所属し、先の嘉幡らとともにトラランカレカ遺跡の調査を実施している。

福原弘識 (埼玉大学ほか) は、嘉幡らとともにトラランカレカ考古学プロジェクトに関わっている他、テオティワカン遺跡ラ・ベンティージャ (La Ventilla) 地区などのアパートメント式複合同士の相互関係に関する調査研究を実施している (e.g. 福原 2012)。

杉山奈和は、杉山三郎とともにテオティワカン研究に従事しており、主に動物考古学的手法を用いてテオティワカン国家の儀礼活動に関する研究などをおこなっている (e.g. Sugiyama et al. 2013)。

(3) チアパス州

メキシコのチアパス州には、高地にはパレンケ (Palenque)、ボナンパック (Bonampak)、ヤシュチラン (Yaxchilán) などの古典期マヤを代表する遺跡、沿岸部にはメソアメリカ最古段階の公共建造物がみつかったパソ・デ・ラ・アマダ (Paso de La Amada) などがあり、古くから現在まで学史上重要な調査研究がおこなわれている地域である。

このチアパス州では、国立人類学歴史学研究所 (Instituto Nacional de Antropología e Historia = 以下 INAH) のチアパス・センターに所属する金子明が調査研究に取り組んでいる。金子は壁画やリントルで有名なヤシュチラン、巨石を使った建造物のあるイグレシア・ビエハ (Iglesia Vieja) の調査および建造物の保存修復活動などに従事している (e.g. 金子 2001; Kaneko 2003, 2011)。

(4) メキシコ湾岸

メキシコ湾岸はオルメカ文化揺籃の地であり、現在のベラクルス州やタバスコ州にサン・ロレンソ (San Lorenzo) やラ・ベнта (La Venta) などが所在している。また、ベラクルス州北部には特異な建造物群や多数の球技場を有するエル・タヒン (El Tajín) などがある。このメキシコ湾岸を主たるフィールドとする日本人研究者には、古手川博一と黒崎充がいる。

古手川は、オルメカ文化研究を専門とし (e.g. 古手川 2005, 2007)、ベラクルス州立大学で教鞭をとる傍ら、考古学実習も兼ねてエステロ・ラボン遺跡 (Estero Rabón) でオルメカ人の生業復元を目的として調査研究をおこなっている。

黒崎は、ユーゴ (Yugo)、アチャ (Hacha)、パルマ (Palma) といった球技と関連する遺物の調査研究を長年おこなっている (黒崎 2003)。現在は、UNAM のアニック・ダニールズ (Annick Daneels) が指揮するベラクルス州中部のラ・ホヤ (La Joya) の発掘調査で出土した大量の埋納土器や土偶資料を用いて、当該地域の古典期後期文化に関する研究をおこなっている (黒崎

2012)。

(5) カンペチェ州, キンタナ・ロー州, ユカタン州

メキシコのカンペチェ州 (Campeche), キンタナ・ロー州 (Quintana Roo), ユカタン州 (Yucatán) はマヤ文明研究におけるメインフィールドでもあるが, 日本人研究者の進出は意外に少ない。そのなかでアリゾナ大学の塚本憲一郎は, グアテマラ国境に近いカンペチェ州に位置するエル・パルマル (El Palmar) の調査に従事し, 碑文の階段を発見するなど活躍している (e.g. Tsukamoto and López 2011)。その他, 建造物群とりわけ広場とそこでおこなわれる儀礼活動に着目し, さまざま集団の社会関係について論じている (Tsukamoto 2014)。

その他, 東海大学の横山玲子らが資源と環境の利用からマヤ文明の動態をみることを目的としてカンペチェ州南部地域の遺跡踏査をおこなっている (横山他 2011)。

(6) バハ・カリフォルニア

バハ・カリフォルニア州 (Baja California) はメソアメリカという文化史的領域には属していない。しかし, この地域では, 藤田はるみ (INAH 南バハ・カリフォルニア・センター) が, 古期や石期といった古い時期に相当する貝塚や洞窟遺跡の調査研究に従事している (e.g. Fujita and Melgar 2014)。先古典期以降 (前 1800 年～) の研究が主体をなすなかで, 藤田の調査は出色といえる。

2-2. ベリーズ

カラコル (Caracol) をはじめ学史的にも極めて重要な遺跡の調査研究が展開されてきたベリーズ考古学の状況は, 日本ではあまり知られていない。こうしたなかベリーズで調査研究を実施している日本人研究者には石原玲子や村田悟がいる。

石原は古代マヤ人の洞窟利用に関する論考を多数発表している (e.g. 石原 2002)。村田はベリーズのカリブ海沿岸における古典期後期の製塩活動や土器製作址に関する調査研究をおこなっている (Murata 2011)。現在はベリーズ川中下流域の考古学プロジェクトに関わっており, マヤ地域では少ない庶民の生活や生業研究に資する調査を実施している。

2-3. グアテマラ

グアテマラのペテン地域 (Petén) にはティカル (Tikal) をはじめとして数多くのマヤ遺跡があり, 同国南部の高地から太平洋岸にかけてはカミナルフユ (Kaminaljuyu) やタカリク・アバフ (Takalik Abaj) といった学史上著名な遺跡がある。このグアテマラ考古学史における日本人研究者による調査の嚆矢としては 1990 年に開始された猪俣健によるアグアテカ (Aguateca) の調査と 1991 年に開始された大井を調査団長とするカミナルフユの調査があげられる。

猪俣は, 1990 年から 1993 年にかけてアグアテカで考古学調査を実施しているが, 1996 年から 2005 年にかけて青山和夫 (茨城大学) らとともに国際的かつ学際的調査団を本格的に組織し, 古典期末期の崩壊過程, 王や貴族の男女の日常生活, 政治経済組織の解明に取り組み, 重要な論考を多数発表している (e.g. 青山 2003; Inomata 2001; Inomata and Houston 2001)。現在, 猪俣は青山らとともにセイバル (Ceibal) 遺跡で学際的調査を 2005 年から継続している。そのセイバルでは, マヤ文明の起源や都市の長期にわたる盛衰過程に関する重要な調査研究が展開されている

(e.g. 青山他 2014a, 2014b; Inomata et al. 2013)。

首都グアテマラ・シティにあるカミナルフユ遺跡の調査は、たばこと塩の博物館を主体とするJT中南米学術調査プロジェクトの一環で1991～1994年におこなわれた。グアテマラにおいて初めての日本人を主体とした組織的調査である。この調査によってカミナルフユ史の再構築が試みられた(e.g. 大井編 1994)。この調査団を率いた大井、伊藤伸幸、柴田潮音らはその後エルサルバドルのチャルチュアパ遺跡に調査対象を移し、調査を継続した。

中村誠一(金沢大学)は、ペテン地域のティカル遺跡においてプロジェクトを実施している。「北のアクロポリス」の考古学調査だけではなく、JICA(国際協力機構)などの支援を受けて文化遺産の保護や活用に関わる人材育成をも視野にいれたプロジェクトである(e.g. 中村編 2013)。ペテン地域では中村の他、白鳥祐子がペテン地域北部のタヤサル(Tayasal)遺跡など後古典期に属する土器や交易に関する調査研究をおこなっている(Shiratori et al. 2011)。

前掲の石原は、現在、グアテマラのキचे県(Quiché)などで先住民社会における教育に関する調査や実践的活動を展開している(e.g. Ishihara 2013)。

2-4. ホンジュラス

ホンジュラスにはマヤ地域を代表するコパン(Copán)やキリグア(Quirigua)が所在する。いわゆる地理的文化的にメソアメリカの周縁地域と位置づけられているが、周縁という特性を活かした新たな視点に基づく調査研究が展開されている地域でもある。

ホンジュラス西部のラ・エントラダ地域(La Entrada)は日本人が初めて大々的かつ組織的に考古学調査を実施した地域である。この調査は国際協力機構青年海外協力隊事業(以下、協力隊事業)の一環で実施されたものである。この協力隊事業は1983年に開始され、1984年から本格的に調査がはじまった。第1・2フェーズをあわせると1993年まで継続され、前掲の中村、猪俣、青山をはじめ、佐藤悦夫(富山国際大学)、寺崎秀一郎(早稲田大学)、長谷川悦夫(埼玉大学ほか)など現在活躍している多数の日本人メソアメリカ考古学研究者が輩出された。彼らによって実施されたラ・エントラダ考古学プロジェクトでは、綿密な踏査に基づく遺跡登録やエル・プエンテ(El Puente)の発掘調査および修復保存活動が組織的におこなわれ、学術的にも社会的にも現地社会に大きな貢献を果たした(e.g. 猪俣・青山 1996; 中村 2007; Aoyama 1999; Schortman and Nakamura 1991)。

その後も日本人によるラ・エントラダ地域やコパン谷での調査は継続され、大きな成果が得られている。例えば、中村はコパン遺跡の発掘調査や保存修復活動に長年従事し、2000年にコパンの中心部からやや離れた地点で10J-45王墓を発見するに至っている(e.g. 中村 2007)。またこの一連のコパン考古学プロジェクトに関わった鈴木真太郎(UNAM)は形質人類学的手法および安定同位体分析を用いて研究を継続している(Price et al. 2014; Suzuki et al. 2013)。寺崎はエル・プエンテの考古学調査を継続し、マヤ南東地域の都市の成立とその展開などに関する論考を発表している(e.g. 寺崎 1998)。なお、佐藤悦夫は現在テオティワカンの土器分析にも従事している(e.g. 佐藤 2009)。

またコパン谷やラ・エントラダ地域以外では、伊藤(名古屋大学)がロス・ナランホス(Los Naranjos)の調査を実施し、建築の諸特徴から政治史について論じている(e.g. 伊藤 2008)

2-5. エルサルバドル

エルサルバドルはメソアメリカ南東部を代表するチャルチュアパ (Chalchuapa) や保存状態の良好な集落社ホヤ・デ・セレン (Joya de Cerén) が所在する。エルサルバドルにおける日本人研究者による考古学調査の嚆矢は、1995年に開始された京都外国語大学調査団によるチャルチュアパの考古学調査である。同遺跡カサ・ブランカ地区の6基の土製建造物のうち3基の発掘調査および建造物の保存・修復活動が実施された (大井編 2000)。

2000年以降、上述の京都外国語大学調査団に主体的に関わった伊藤や柴田らを中心にエルサルバドル考古学プロジェクトがはじまり、チャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区4Nトレンチの調査を皮切りに、タスマル地区、エル・トラビチェ地区といったチャルチュアパ遺跡の調査研究を中心に活動を展開している (e.g. 伊藤・柴田 2007, 2013; 伊藤他 2009)。

2003年からは協力隊事業がエルサルバドルで開始される。上述したホンジュラスの場合と比較すると派遣人数としては小規模ではあるが、チャルチュアパでの活動を中心に2014年まで派遣が継続された。この協力隊事業においては発掘調査から整理作業や報告書の作成、修復保存活動、そして成果の社会還元という考古学という学問上必要な技術や知識の移転が図られた。学術的貢献としては、加藤慎也によるチャルチュアパ遺跡タスマル地区B1-2建造物の調査のほか、筆者によるチャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区における埋葬地区の発見、カサ・ブランカ地区5号建造物前の石碑祭壇複合の発見などがある (e.g. Kato et al. 2006; 市川 2012b, 2013)。村野正景 (京都文化博物館) は、エルサルバドルでの隊員経験をもとにパブリック考古学的観点から文化遺産の保護や活用に関する論考を発表している (e.g. 村野 2010, 2011)。

筆者は協力隊終了後にエルサルバドル太平洋沿岸部に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の調査を実施し、イロバング火山噴火の年代や影響、製塩活動に関する調査研究をおこなっている (e.g. 市川 2014)。2015年からはサン・アンドレス遺跡やカラ・スーシア遺跡といった複数の公共建造物群で構成される遺跡の調査を通じて、メソアメリカの周縁地域の独自性や周辺地域との地域間関係、火山噴火と人間社会の関係などについて通時的視点に基づき解明するための調査を予定している。

2-6. ニカラグア, コスタリカ

ニカラグアの太平洋岸やコスタリカ西部はメソアメリカの範疇に、それ以外の地域はメソアメリカ文明とアンデス文明に挟まれた地域、すなわち「中間領域」と呼ばれている。この地域では長谷川や南博史 (京都外国語大学) が調査をおこなっている。長谷川は、メキシコ中央高原から現在のニカラグアあたりまで南下したチョロテガや中間領域の特殊な発展過程に関する論考などがある (e.g. 長谷川 1999, 2002)。現在、より精度の高い編年構築にむけてマナグア湖周辺の堆積の良好な遺跡の調査をおこなっている。南は、考古学と博物館学を融合した地域開発の実践的活動をおこなっているが、同時にマタガルパ県ラス・ベガス遺跡で考古学調査をおこなっている (南 2013)。

2-7. 小結

以上、メソアメリカ各地域における日本人による調査研究について概述してきた。重要なことは、メソアメリカのほぼ全域をカバーできる調査研究を日本人が展開しているという点にある。

研究対象となる時期は、先古典期や古典期が主ではあるが、古期や石期、後古典期も含めほぼ全時期をカバーすることができる点も重要であろう。

この現在地に至るまでの道程は、東京大学文化人類学教室が主体となり始まり、55年以上もの歴史を有する日本アンデス調査団の経緯とは明らかに異なる。日本アンデス調査団は研究開始期から組織的であり継続的であった。一方のメソアメリカの場合には、研究を開始するきっかけとしては、少なくとも2つの道程がある。ひとつは、現地の大学や研究機関に単独で入り、個々人の興味関心の範疇において調査を開始する場合、もうひとつは協力隊事業をきっかけとして「国際協力としての考古学」からメソアメリカ考古学研究を開始する場合である。

こうした道程の結果と考えられるが、海外の研究機関に所属する研究者が比較的多く、欧米考古学や人類学を積極的に取り入れた論文も比較的多いという特徴がある。またJICAや国際交流基金などの支援をうけて文化遺産の保護と活用に関する実践的活動がおこなわれている点も特徴としてあげることができる。

3. 日本人研究者によって執筆されたメソアメリカ考古学関連文献の動向分析

ここでは、日本人研究者によって執筆された欧文および邦文のメソアメリカ考古学関連文献の動向分析をおこなう。前節までよりも定量的なデータを用いて研究動向を把握する。以下、文献数、国別、研究対象とする地域および文化別、研究テーマ別、掲載媒体の種類について時系列的にその趨勢を把握し、研究の現在地について確認する。

3-1. 資料

本分析で扱った文献は、論文検索 Web サイト (JSTOR, OPAC, CiNii, J-Global, Research Map, Academia.edu) や各教育機関 Web サイトに掲載された各研究者の業績一覧などを用いて収集した。2014年12月26日時点で、少なくとも75名が執筆しており、邦文文献494報、欧文文献283報の計777報ある。なお、複数名の日本人で執筆された文献は1報と数えている。また、調査報告書、会報記事や新聞記事は含めていない。遺漏もあると考えられるが、査読制度を有する主要な学術雑誌や高等教育機関の研究紀要を網羅し、市販の著書も可能な限り渉猟してあるので、動向分析に大きな支障はないものとする。

3-2. 分析

(1) 文献数の推移

文献数の推移の特徴としては、次の3点を指摘することができる (図2)。

第一に、1975年ごろから論文数が増加することである。これは、とりわけメキシコ中央高原において日本人が本格的に調査にかかわり、その結果として調査で得られた一次資料を用いて論文や著書が書かれたことと関連している (e.g. 大井 1975)。また、著名なマヤ文明に関する欧文文献の訳書も刊行された (コウ 1975)。

第二に、1985年代以降に文献数の急増がみられることである。これは、先のメキシコ中央高原での活動にくわえて、ホンジュラスにおいて協力隊事業の開始が強く関係している。このホンジュラスにおける組織的な考古学調査は、その後多数の研究者を輩出したという点で日本における

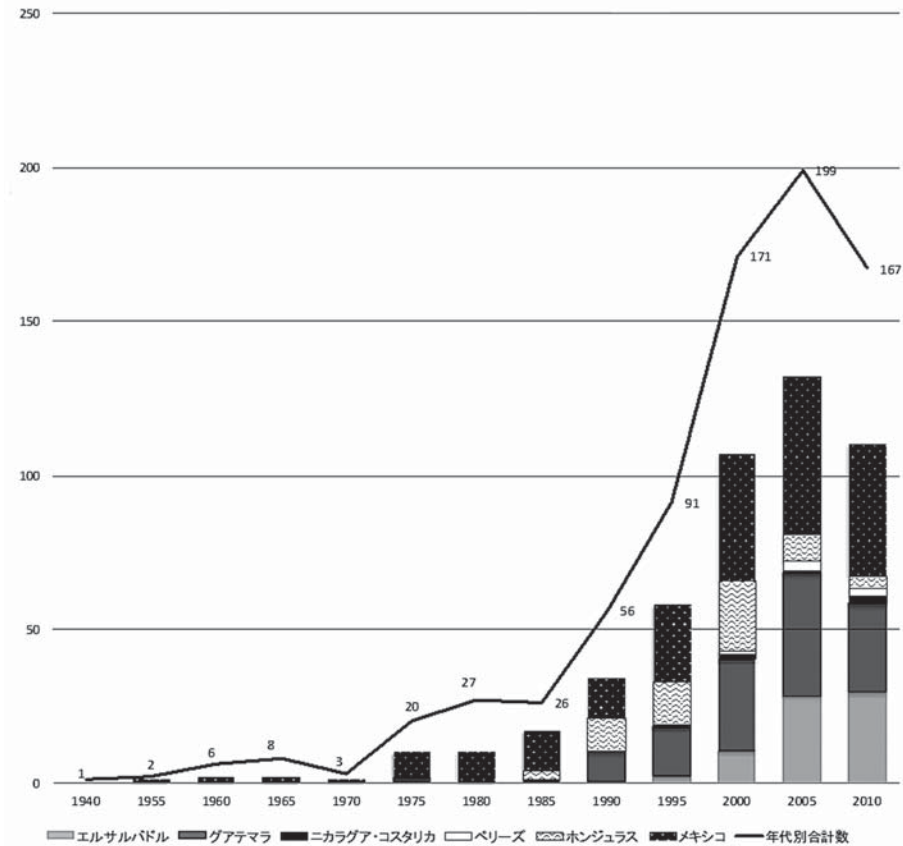


図2 論文数の総数および国別動向の推移

メソアメリカ考古学研究の転換期と位置づけられよう。

第三に、1995年以降は、さらに著しく文献数が伸びることである。この背景には「古代アメリカ学会」の設立がある。古代アメリカ学会は1996年に設立された「古代アメリカ研究会」をその前身とし、2003年に現在の名称になった。同学会は、南北アメリカ先史学・考古学ならびにその関連分野を研究する者が、活発な意見・情報の交換を通して互いの研究の深化と知見の拡大をはかり、日本における当該研究の発展に寄与することを目的としている。この古代アメリカ学会は、日本で唯一の新大陸考古学関連のテーマを扱った学会誌『古代アメリカ』を毎年1冊発行しており、日本国内のメソアメリカ考古学研究の基盤を形成することに寄与している。

(2) 国別動向の推移

国別動向の推移については、文献中で扱っている遺跡が所在する国を数値化している(図2)。1文献中で複数国を扱っている場合には個別に集計している。なお、マヤ、メソアメリカといった総説系の論考等は含めておらず、前述の文献数の合計とは必ずしも一致しない。国別動向の推移の特徴については、次の2点を指摘することができる。

第一に、研究黎明期から現在に到るまでメキシコが圧倒的に多い点である。マヤ、テオティワカン、アステカなどの諸文化が栄えた地というだけでなく、UNAMやENAH、INAHといったメソアメリカ考古学の中心機関が存在することも大きい。UNAMやENAHで学位を取得し、INAHや現地の研究機関に所属し、研究を継続している日本人研究者は、日本在住の研究者にとって現地の動向をタイムリーに把握する上でも貴重な存在である。

第二に、1990年以降にグアテマラやエルサルバドルの文献数が増加する点である。これは前掲の元ホンジュラス隊員世代である猪俣や青山らによるアグアテカ遺跡やセイバル遺跡の調査研究、大井や伊藤らによるグアテマラのカミナルフ遺跡やエルサルバドルのチャルチュアパ遺跡の調査研究、エルサルバドルへの協力隊事業の開始がその背景にある。

ベリーズ、ニカラグア、コスタリカに関する文献は上述した地域と比較すると格段に少ないが、2000年以降は微増傾向にはある。長谷川や南らが調査を継続しており、今後の調査の進展が期待される。

(3) 研究対象とする地域および文化別動向の推移

研究黎明期には新大陸やラテンアメリカ全体（分類上は「その他」に含まれている）が多い。以後テオティワカン、アステカなどに関連する諸論考がみられるものの、マヤを取り扱う研究が圧倒的に多い（図3）。また、国別動向にも反映されているようにエルサルバドルなどのメソアメリカ南東部を扱う研究も近年増加傾向にある。

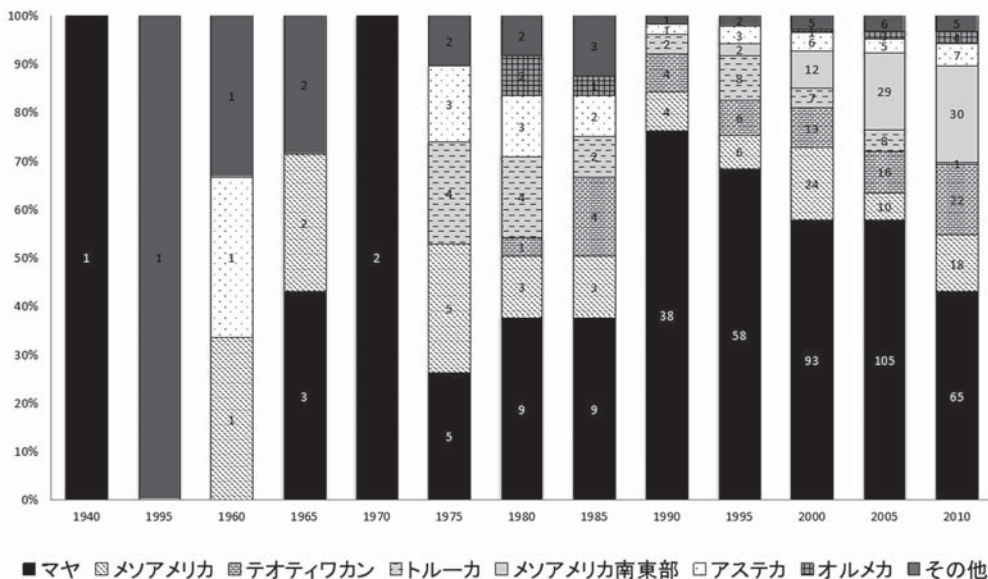


図3 研究対象とする地域および文化別動向の推移

(4) 研究テーマ別動向の推移

研究テーマは、「総説」（概説、遺跡紹介、動向等）、「調査報告」、「政治史」（権力の生成・衰退過程、戦争等）、「宗教祭祀」（儀礼や宗教の研究等）、「遺物遺構」（型式や機能の変遷等）、「技術生産」（生業、製作技法等）、「流通」（遠距離交易等）、「文字図像」（暦や図像の解釈等）、「墓制」、「自然科学・環境」（年代測定、同位体分析等）、「観光・教育」（博物館学も含む）に分類した。研究分野の推移の特徴については、次の3点を指摘することができる（図4）。

第一に、全般に総説系が多い。内容はマヤに関することが多いが、テオティワカンやアステカ、オルメカに関する情報も概説書にみられ、メソアメリカの通史は日本語でも今日までに概ね網羅できる状況にあると言える（e.g. 青山 2007, 2013; 青山・猪俣 1997; 伊藤 2011; 井上 2014; 杉山・他 2011）。この総説系は1985年以降増加傾向にあるものの全体に占める割合は20～25%ほどと変化がなく、その後は「調査報告」やその他の分野の割合が増加する。これは日本人による現地での調査事例が増加していることに他ならない。

第二に、1980年代以降に研究が多様化することである。分野としては「政治史」や「宗教祭祀」が多く、次いで「技術生産」、「遺物遺構」が多い。政治史や宗教祭祀については、マヤ王朝史の復元やその衰退や崩壊に関する研究などメソアメリカ文明を考える上で重要なトピックが研究動向に反映されているといえるだろう。技術生産や遺物遺構に関する研究では、使用痕を中心とした石器研究やセトルメント・パターン研究に関連する論考が中心である。欧米の研究者によって盛んにおこなわれている「文字図像」の研究事例は意外と少ない。「観光・教育」分野の文献の増加が2005年以降みとれる。この分野への貢献は昨今の世界の考古学界に求められつつある分野であり、そうした社会的背景が反映されているものと考えられる（e.g. 杓谷 2011; 村野 2011）。

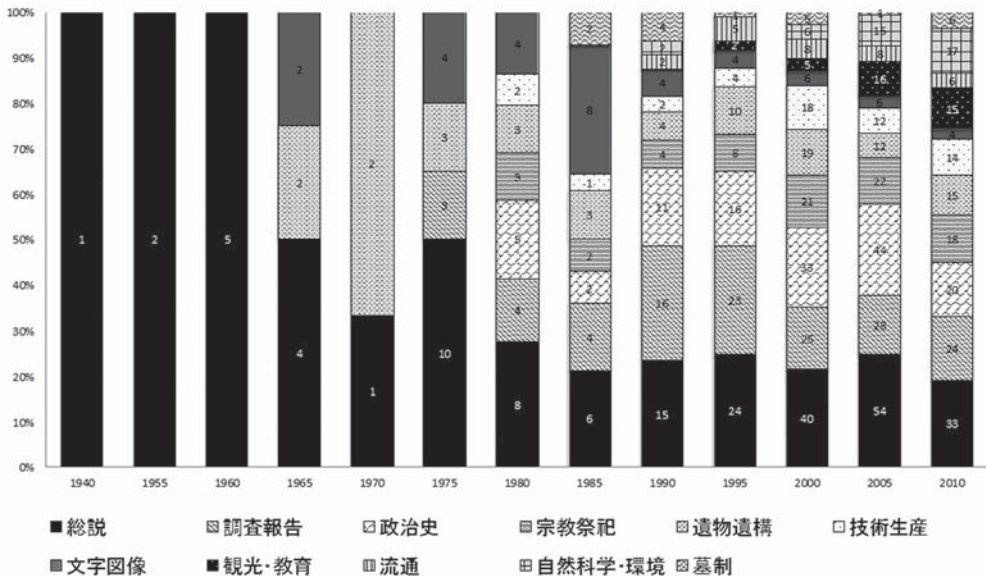


図4 研究分野別動向の推移

第三に、「自然科学・環境」分野の論考が少ないことである。ただし必ずしも自然科学的手法が調査研究に導入されていないというわけではない。むしろ実際には文献中に自然科学的手法を一部取り入れているものも多く、研究の実証性をより高いものになっている。また環境をキーワードとした文献は、2010年以降に増えているが、とくに環境変動と文明の盛衰過程に関する重要な知見を含む著書が刊行されている（e.g. 青山他 2014a, 2014b）。

3-4. 掲載媒体の種類

上述した文献の掲載媒体の種類について集計をおこなった（表1・2）。まず邦文・欧文文献ともに査読制度をもつ「学術雑誌」と「その他の媒体（紀要・論集・雑誌・著書）」という二つに区分した。「その他」には、邦文文献の場合には掲載件数の多い大学等の研究機関で発行されている「紀要」と「その他の媒体（論集・雑誌・著書など）」にわけ、欧文文献の場合には掲載件数の多い「グアテマラ考古学シンポジウム論集」と「その他の媒体（論集・雑誌・著書など）」に分けている。著書は単著だけでなく、分担執筆分なども含む。

掲載媒体の種類の特徴については、次の2点が指摘できる。

第一に、邦文文献については紀要やその他の媒体が圧倒的に多く、査読制度のある学術雑誌への掲載件数が少ないことがあげられる（表1）。新大陸考古学を主に扱う『古代アメリカ』を除けば、

表1 掲載媒体の種類（邦文）

【邦文学術雑誌】			
雑誌名	合計	論文 研究ノート	調査動向・書評 ・遺跡紹介など
古代アメリカ	48	45	3
考古学研究	14	4	10
古代文化	14	10	4
考古学ジャーナル	12	0	12
ラテンアメリカ・カリブ研究	5	4	1
古代学研究	4	2	2
第四紀研究	3	3	0
民族学研究	3	3	0
ラテンアメリカ研究年報	3	3	0
旧石器考古学	2	0	2
考古学雑誌	2	2	0
動物考古学	2	2	0
イペロアメリカ研究	2	2	0
遺跡学研究	1	1	0
貝塚	1	0	1
考古学と自然科学	1	1	0
歴史学研究	1	1	0
合計	118	83	35
【その他】			
紀要	129		
その他の媒体（論集・雑誌・著書）	247		
合計	376		
邦文雑誌合計	494		

表 2 掲載媒体の種類 (欧文)

【欧文学術雑誌】			
雑誌名	合計	論文 研究ノート	コメントなど
Latin American Antiquity	7	7	0
Current Anthropology	6	1	5
Mexicon	6	6	0
Ancient Mesoamerica	5	5	0
Antiquity	4	4	0
Estudios de Cultura Maya	3	3	0
Jrounal of Archaeological Science	3	3	0
Journal of Field Archaeology	3	3	0
Mayab	3	3	0
Advances in Archaeological Practice	1	1	0
American Anthrpologist	1	1	0
Anthropozoologica	1	1	0
Archaeological Papers of the American Anthropological Association	1	1	0
Estudios de Antropologia Biologica	1	1	0
Geoarchaeology	1	1	0
Journal de la Societe des Americanistes	1	1	0
Journal of Anthropological Archaeology	1	1	0
Science	1	1	0
World Archaeology	1	1	0
合計	50	45	5
【その他】			
グアテマラ考古学シンポジウム論集	52		
その他の媒体 (論集・雑誌・著書)	181		
合計	232		
欧文雑誌合計	284		

論文や研究ノートの学術雑誌への掲載数は概ね一桁台にとどまっている。

第二に、欧文献については人類学系の雑誌や中南米を専門とする著名な雑誌に掲載されている傾向があることである (表 2)。また、Mexicon (ドイツ)、Antiquity (イギリス)、Estudios de Cultura Maya (メキシコ)、Mayab (スペイン)、Anthropozoologica や Journal de la Société des Américanistes (フランス) といったアメリカ以外の学術雑誌にも件数は少ないものの掲載されている。毎年 7 月にグアテマラ・シティで開催されるグアテマラ考古学シンポジウムは、毎年論集が確実に出版されるために、掲載件数が多い。

3-5. 小結

上述した文献の動向分析結果に基づき、メソアメリカ考古学における日本人研究者の歩みを簡潔にまとめると、以下のようになる。

1940 年代には新大陸の古代文明の紹介がはじまり、その流れは 1960 年代まで続く。1970 年代以降、とりわけ 1980 年代後半になると日本人が現地では発掘調査に直接従事し、一次資料を用いた実証的な研究が増加する。そのため必然的に文献数が増加した。そして、2000 年代以降は、研究が多様化し、現在では幅広い地域や年代を扱えるまでに研究者の裾野が広がっている段階にきて

いる。さらに国外では著名な学術雑誌にも研究成果が掲載され、日本人の研究が世界的に認められていることがわかる。

以上のような動向を敷衍するならば、日本人によるメソアメリカ考古学研究は盛んになってきていることは疑いない。しかしながら、本稿の冒頭で述べたように日本国内において学術的にも社会的にも古代メソアメリカ文明についてはあまり良く知られていない。

その要因のひとつとして、掲載媒体の種類に関するデータのみにもとづけば、日本国内で比較的読者数の多いと思われる媒体に研究成果の掲載件数が少ない点を指摘することができる。多くの示唆に富む論考があるにもかかわらず周知されていないということは、幅広い読者を獲得できていないことに起因していると考えられる。

4. 今後の課題

以上、メソアメリカ考古学における日本人研究者の歩みを概観し、研究の現在地を確認する作業をおこなってきた。最後に、日本におけるメソアメリカ考古学の今後の課題について、自戒の念も込めて述べていきたい。これまでの研究の歩みや文献の動向分析の結果をふまえるならば、「世代間・世代内のネットワーク強化」および「成果還元」が今後の重要な課題であると筆者は考えている。

4-1. 世代間・世代内のネットワーク強化

まず、研究者の世代間・世代内のネットワーク強化は、次世代を創出していくうえで必要不可欠であると考えられる。個々人の活動が主体である日本人によるメソアメリカ考古学研究の現状は、「継続性」ということを考慮した場合には必ずしも盤石とはいえないからである。さらに、メソアメリカ考古学を専門とする日本人研究者が増加しているとはいえ、日本国内には学部から博士課程後期まで一貫してメソアメリカ考古学やその関連分野を学べる環境はない。これまでの研究者らは、個人の判断や裁量において留学や協力隊事業へ参加することで、現地調査を実施してきた経緯がある。こうした状況は今後も続く予想される。そこで次世代における研究の裾野を維持または拡大しようとする場合、個々人の活動が主体であっても研究者間のネットワークをこれまで以上に強化することによって、次世代がさまざまな切り口でメソアメリカ考古学にアプローチできる門戸を提供することができると考える。

この点において、日本各地でさまざまな研究会が開催されていることも見逃してはならない。古代アメリカ学会の会報34号によれば、新大陸関連の研究会などが東北、関東、関西にあわせて少なくとも8つは存在している。こうした各地で定期的に開催される研究会は、意見・情報交換のために研究者や学生が集い、交流ネットワークを構築するための貴重な場と位置づけられる。学会などの研究大会とは異なるので、興味関心のある学生は積極的にこれらの研究会に参加し、意見・情報交換をすることを勧めたい。一方で博士課程後期以上の研究者については、こうした研究会に学生や後輩などを積極的に勧誘することが求められよう。このような研究会を通じて、大学という枠組をこえて相互の交流ネットワークを構築できると私考する。

また、より専門的な集団による分野横断的な交流も重要である。たとえば、科学技術研究補助金の支援を受けた2つの新学術領域研究「環太平洋の環境文明史（2009～2014年・終了課題）」

と「古代アメリカ比較文明論（2014～2019年）」（いずれも領域代表・青山和夫）では、メソアメリカだけではなく、アンデスや日本などを専門とするさまざまな世代の研究者が、人社系・自然科学系の垣根を超えて交流する。こうした交流は現況の研究者にとっても極めて有用なものであり、新たな研究成果や視点を生み出すことに繋がっていくものと思われる。

4-2. 成果還元

成果還元については、日本国内に焦点をあてて述べるが、大きく学术界と一般社会の二つにわけて考える必要があるだろう。

学术界での成果還元は、前述したように比較的読者数の多い媒体に成果を掲載することが今後求められよう。国内の学術雑誌への投稿を考える際、テーマ設定は重要である。例えば、単に個別事例ではなく、社会の複雑化や国家形成といった、より汎用性のあるテーマ、新たな方法論や考古学・人類学の理論を導入した研究成果などが挙げられるだろう。近年は比較考古学的研究が盛んになってきている他、考古学・人類学理論を援用した論考も日本国内の学術雑誌でもみられることから、投稿の下地は整っているものと筆者は感じている。手始めに、日本で開催されている考古学系の学会や研究会で発表し、反応や意見を求めることを積極的におこなっていくことから始めてみてはいかがだろうか。

ただし、筆者は査読制度のある学術雑誌への掲載だけが解決法であると言っているのではない。たとえば、大学などの研究紀要などは近年オープンアクセス化が進んでおり、以前よりも多くの読者を獲得できる可能性を秘めており、その有効活用を模索していく必要があるだろう。また、単に論文を掲載することだけが最終目的となつてはならず、第一に堅実な調査に基づく成果を獲得することが重要である。また、当然ながら調査対象地である現地社会にも成果を還元することを怠ってはならないと考える。

一般社会へ向けた成果還元については、すでに古代アメリカ学会による重要な貢献がある。同学会の働きかけにより高校世界史教科書における新大陸の諸文明の記述が改善され、以前よりも正確な情報が提供されることとなった（e.g. 青山他 2013）。この他にも近年は、一般公開のフォーラムや公開講座が毎年催されている。定期的に開催されているものでは、「アンデス文明研究会」の定例講座が挙げられる。また、2003年には「マヤ文明展」、2007年には「インカ・マヤ・アステカ展」、2010年には「古代メキシコ・オルメカ文明展」が開催され、近年ではテレビ等で新大陸に関連する番組が放映される機会も増えた。

このような様々な努力や催し物が開かれていることに鑑みれば、国内における認知度は従来よりも高いことが予想される。しかし、依然としてあまり知られていないと感じられるのはなぜであろうか。ひとつの要因としては、催し物が大都会に集中していることで生じる、地方との情報格差が挙げられるだろう。もちろん地方でまったく関連する催し物がないわけではない。全国各地に存在する各研究者が個人レベルで市民公開講座、小中高校などの教育機関への出前講座などを地道に継続しているとも聞く。一朝一夕に解決できる問題ではないことから、組織レベル、個人レベルで意識的かつ地道に活動を展開していくことが肝要であると考えられる。

情報格差を縮小させるための手段としては、新たなメディアを用いた成果還元の方法を積極的に模索していくことを提案したい。近年は、ブログ、Facebook や Twitter といった新たなメディアを用いて考古学プロジェクトの進捗状況や写真などを掲載するといった試み、YouTube や

Ustream を使った講義や公開フォーラムは世界的に広くみられる。こうした新たなメディアの積極的な活用は、情報が国内にとどまらず、世界中どこにいてもアクセス可能であるという点で、海外在住の日本人に向けても発信が可能であるという利点がある。もちろん言語をスペイン語や英語にすれば、対象者を世界に広げることができる点でも新たなメディアの導入は有用性があるといえるだろう。

おわりに

学史の整理は、研究の現在地を確認し、研究の流れを次世代に繋げていくために必要な作業である。本稿で最後に示した今後の課題や見通しについては、決して真新しい意見とも言えないだろう。まずは筆者自身に取り組むべき課題として実践することから始めたい。当然ながら各研究者がおかれた立場や環境によって異なる意見が表出してくると思われるが、皆様のご意見・ご批判をいただければ幸いである。

筆者の能力の範疇をこえるため紹介できなかったが、メソアメリカという領域においては歴史学や言語学など隣接分野においても重要な貢献をされている日本人研究者がいることも最後に付け加えておきたい (e.g. 井上 2012; 大越 2003; 八杉 2005)。

謝辞

本稿執筆のきっかけとなった京外大シンポで口頭発表の機会をいただいた京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所、同大学国際文化資料館の関係者の方々には深謝申し上げます。文献収集については新谷葉菜、八木宏明、深谷岬の手を煩わせた。記して感謝申し上げます。なお、本稿の一部には日本学術振興会新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」研究項目 A02「メソアメリカ比較文明論」(研究代表者: 青山和夫, 研究分担者: 市川彰, 課題番号 26101003) および日本学術振興会特別研究員奨励費 (研究代表者: 市川彰, 課題番号 25・824) の助成を受けておこなった調査成果も含む。

参考文献

青山和夫

- 2003 「古典期マヤ支配層の手工業生産と日常生活－グアテマラ共和国アグアテカ遺跡出土の石器分析を通じて－」『古代アメリカ』6号, pp.1-33。
- 2007 『古代メソアメリカ文明－マヤ・テオティワカン・アステカ』講談社選書メチエ。
- 2009 「外国考古学の動向 (アンデスとメソアメリカ)」『日本考古学年報 (2007 年度版)』60号, pp.93-101。
- 2013 『マヤ文明－密林に栄えた石器文化』岩波書店。

青山和夫・猪俣健

- 1997 『メソアメリカの考古学』同成社。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土（編）

2014a 『マヤ・アンデス・琉球 環境考古学で読み解く「敗者の文明」』朝日新聞出版。

2014b 『文明の盛衰と環境変動－マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』岩波書店。

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・井関睦美・長谷川悦夫・嘉幡茂・松本雄一

2013 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか－新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史の検証」『古代アメリカ』16号, pp.85-99。

石原玲子

2002 「土器からみた古代マヤの洞窟利用－ベリーズ, チェチュム・ハ洞窟遺跡を一例として」『古代アメリカ』10号, pp.23-48。

井関睦美

2011 「アステカ王国主都の主神殿出土遺物に関する研究動向－銅製鈴の形態変化と通時分析の可能性－」『古代アメリカ』14号, pp.67-76。

市川彰

2011 「エルサルバドル共和国チャルチュアバ遺跡」『考古学研究』58巻2号, pp.125-127。

2012a 「日本人研究者によるメソアメリカ考古学研究の動向」『古代学研究』194号, pp.24-27。

2012b 「土壙墓からみた先スペイン期の墓制と社会に関する一考察」『古代学研究』195号, pp.31-41。

2014 「エルサルバドル共和国レンパ川下流域2014年調査速報」『古代アメリカ』17号, pp.89-100。

伊藤伸幸

2008 「ロス・ナランホスからみた先スペイン期都市の政治史に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』（『史学』54号）, pp.83-104。

2011 『中米の初期文明オルメカ』同成社。

伊藤伸幸・柴田潮音

2007 「チャルチュアバ遺跡タスマル地区B1-1建造物南側より出土した供物に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』54号, pp.8-20。

2013 「中米エルサルバドル共和国, チャルチュアバ遺跡群サンアントニオ農園内で石彫が出土」『チャスキ』47号, p.17。

伊藤伸幸・柴田潮音・南博史

2009 「チャルチュアバ遺跡（エル・サルバドル共和国）の先古典期後期に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』55号, pp.55-79。

井上幸孝

2012 「アステカ社会と環境文明史－メソアメリカ自然観の理解にむけて」『第四紀研究』51巻4号, pp.223-230。

2014 『メソアメリカを知るための58章』明石書店。

猪俣健・青山和夫

- 1996 「先産業社会における空間配置と経済効率原理－古典期マヤ社会についての中心地分析－」『民族学研究』61巻3号, pp.370-392。

大井邦明

- 1975 「テオテナンゴ遺跡の調査－メキシコ考古学界の動向にふれて－」『考古学ジャーナル』114号, pp.2-7。
1985a 『ピラミッド神殿発掘記－メキシコ古代文明への誘い』朝日新聞出版。
1985b 『消された歴史を掘る－メキシコ古代史の再構成』平凡社。
1994 『カミナルフユ』たばこと塩の博物館。
2000 『チャルチュアパ』京都外国語大学。
2006 「遺跡・古環境・地域社会・博物館」『MUC 京都外大国際文化資料室紀要』2号, pp.31-46。
2007 「ティンガニオ・メキシコ西部の古典期文化」『MUC 京都外大国際文化資料室紀要』3号, pp.1-40。

大越翼

- 2003 「聖なる樹の下で－マヤの王を考える－」『古代王権の誕生 II 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』角田文衛・上田正昭監修, pp.169-205。

金子明

- 2001 「ヤシュチランにおける権力と抗争」『古代文化』53号, pp.17-32。

嘉幡茂

- 2008 「トルーカ盆地のダイナミズム－メキシコ州, サンタ・クルス・アティサパン遺跡のデータを基に」『古代アメリカ』11号, pp.1-26。古代アメリカ学会。
2013 「古代交易システムの復元に向けて:周辺から周辺へ,そして周辺から中央へ」『アイデンティティーの構築, 脱構築, そして再構築－メキシコ, テオティワカンと Cholula のモニュメント 2千年史』, 杉山三郎・嘉幡茂・谷口智子・丹羽悦子(編集), pp.139-154。愛知県立大学。

嘉幡茂, 村上達也, フリエタ・M・ロベス, ホセ・J・チャベス, 福原弘識

- 2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて－トラランカレカ考古学プロジェクト」『古代アメリカ』17号, pp.53-72。

黒崎充

- 2003 「メキシコ湾岸地方におけるユーゴについて－ベラクルス州中部地方における発掘調査資料を中心として」『山口大学考古学論集－近藤喬一先生退官記念論文集』pp.407-422。
2012 「ベラクルス州中部南域の古典期後期－ラ・ホヤ遺跡における一括資料(デポジット)」『山口大学考古学論集－中村友博先生退任記念論文集』pp.335-344。

コウ, マイケル・D (寺田和夫・加藤泰建訳)

- 1975 『マヤ』学生社。

古手川博一

- 2005 「オルメカ文化研究史における政治体制理解の再検討」『マヤとインカー 王権の成立と展開』 pp.17-28。同成社。
2007 「文明の形成と環境－オルメカの環境適応と資源利用をめぐる」『ラテンアメリカ』朝倉世界地理学講座 14, pp.37-50。朝倉書店。

桜井三枝子

- 2004 「マヤ研究史をたどる」『大阪経大論集』54 巻 5 号, pp.239-254。

佐藤悦夫

- 2009 「テオティワカン「月のピラミッド」56 層および第 1 期建造物出土のパトラチケ期の土器」『古代アメリカ』12 号, pp.105-122。

杓谷茂樹

- 2011 「マヤ・イメージの形成・消費と古代遺跡－マストゥーリズム状況下を生きるマヤ遺跡公園のイメージ戦略」『大阪経大論集』61 巻 6 号, pp.79-106。

杉山三郎

- 2001 「テオティワカンにおける権力と抗争」『古代文化』53 巻 7 号, pp.379-392。
2007 「アステカ文明 発掘された巨大彫刻－テンプロ・マジョール博物館・都市考古学プロジェクトの大発見」『ニュートン』27 巻 8 月号, pp.98-107。
2012 『ロマンに生きてもいいじゃないか－メキシコ古代文明に魅せられて－』風媒社。

杉山三郎・渡部森哉・嘉幡茂

- 2011 『古代メソアメリカ・アンデス文明への誘い』風媒社。

寺崎秀一郎

- 1998 「古典期マヤ政体の拡大：南東マヤ地域を例として」『史観』138 号, pp.66-85。

中村誠一

- 2007 『マヤ文明を掘る－コパン王国の物語』NHK ブックス。
2013 「ティカル北のアクロポリスプロジェクト報告 (1)」『文化資源学研究』13 号。金沢大学国際文化資源学研究センター。

長谷川悦夫

- 1999 「先コロンブス期のマナグア湖畔－チョロテガの移住に関する諸問題－」『古代アメリカ』2 号, pp.59-82。
2002 「伝播か在地発展か－1980 年代以降の中央アメリカ南部考古学の動向－」『古代アメリカ』5 号, pp.1-22。

福原弘識

- 2011 「テオティワカン, ラ・ベンティージャにおける遺構図のデジタル三次元地図化」『古代アメリカ』14 号, pp.57-66。

南博史

- 2013 「中間領域ニカラグアにおける考古学の現状と課題－ニカラグア・マタガルパ県ティエラ・ブランカ遺跡の予備調査を通して－」『MUC 京都外大国際文化資料館紀要』9号, pp.33-45。

村野正景

- 2010 「エルサルバドル共和国における遺跡保護に関する一考察－文化遺産国際協力の向上のため」『遺跡学研究』7号, pp.221-223。
- 2011 「エルサルバドル共和国の学校教育における遺跡訪問の現状と課題－文化遺産保護と基礎教育の連携向上を目指して－」『ラテンアメリカ・カリブ研究』18号, pp.15-33。

八杉佳穂

- 2005 『マヤ文字を書いてみよう読んでみよう』白水社。

横山玲子・松本亮三・吉田晃章

- 2011 「カンペチェ州南部地域における遺跡踏査概報」『古代アメリカ』14号, pp.77-82。

吉田晃章

- 2014 「メキシコ西部サユラ盆地およびサコアルコ盆地における踏査概報（2014年度）」『古代アメリカ』17号, pp.73-88。

Aoyama, Kazuo

- 1999 *Ancient Maya State, Urbanism, Exchange, and Craft Specialization: Chipped Stone Evidence from the Copan Valley and the La Entrada Region, Honduras*. University of Pittsburgh Press, Philadelphia.
- 2002 “Mesoamerican Archaeology as Anthropology and History: Anthropological Archaeological Research in Mesoamerica by Japanese Scholars”. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3, pp. 31-55.

Fujita, Harumi and Emiliano Melgar

- 2014 “Hide-Working at Covacha Babisuri on Espíritu Santo Island, Baja California Sur, México”. *Journal of Island and Coastal Archaeology* 9, pp.111-129.

Inomata, Takeshi

- 2001 “The Power and Ideology of Artistic Creation: Elite Craft Specialists in Classic Maya Society”. *Current Anthropology* 42 (3), pp.321-349.

Inomata, Takeshi and Stephen Houston

- 2001 *Royal Courts of the Ancient Maya*. Westview Press, Boulder.

Inomata, Takeshi, Daniela Triadan, Kazuo Aoyama, Victor Castillo, Hitoshi Yonenobu

- 2013 “Early Ceremonial Constructions at Ceibal, Guatemala, and the Origins of Lowland Maya Civilization”. *Science* 340, pp.467-471.

Ishihara-Brito, Reiko

- 2013 *Educational Access is Educational Quality: Indigenous Parents' Perceptions of Schooling in Rural Guatemala*. Prospects: Quarterly Review of Comparative Education, Springer.

Kaneko, Akira

- 2003 *Artefacto de líticos de Yaxchilán*. INAH, México.
2011 “Iglesia Vieja: Un sitio megalítico del Clásico Temprano en la Costa del Pacífico de Chipas”. En *XXVI Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2010*, pp.663-680. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Kato, Shinya, Shione Shibata y Nobuyuki Ito

- 2006 “Las investigaciones arqueológicas en Tazumal, 2004-2005”. En *XIX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2005*, pp.211-222. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Murakami, Tatsuya

- 2010 *Power Relations and Urban Landscape Formation: A study of Construction Labor and Resource at Teotihuacan*. Ph.D. Dissertation presented at Arizona State University.

Murakami, Tatsuya, Gregory Hodgins and Arleyn W. Simon

- 2012 “Characterization of Lime Carbonates in Plasters from Teotihuacan, Mexico: Preliminary Results of Cathodoluminescence and Carbon Isotope Analyses”. *Journal of Archaeological Science* XXX, pp.1-11.

Murata, Satoru

- 2011 *Maya Salters, Maya Potters: The Archaeology Of Multicrafting On Non-Residential Mounds At Wits Cah Ak'Al, Belize*. Ph.D. Dissertation Boston University.

Price, Douglas, Seiichi Nakamura, Shintaro Suzuki, James H. Burton and Vela Tiesler

- 2014 “New Isotopic Data on Maya Mobility and Enclaves at Classic Copan, Honduras”. *Journal of Anthropological Archaeology* 36, pp.32-47.

Schortman, Edward and Nakamura Seiichi

- 1991 “A Crisis of Identity: Late Classic Competition and Interaction on the Southeast Maya Periphery”. *Latin American Antiquity* 2, pp.311-336.

Shiratori Yuko, Mario Zetina, Miriam Salas y Aura Soto

- 2011 “Cerámica de los Maya Izta alrededor de los lagos de Petén”. En *XXIV Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala*, pp.858-866. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.

Sugiura, Yoko

2005 *Y atrás quedó la Ciudad de los Dioses: historia de los asentamientos en el Valle de Toluca*. UNAM, México.

2009 *La gente de la ciénaga en tiempos antiguos: la historia de Santa Cruz Atizapán*. UNAM, México.

Sugiura, Yoko, Magdalena García y Alberto Aguirre

1998 *La caza, la pesca y la recolección: etno arqueología del modo de subsistencia lacustre en las Ciénegas del Alto Lerma*. UNAM, México.

Sugiyama, Nawa, Raúl Valadez, Gilberto Pérez, Bernardo Rodríguez y Fabiola Torres

2013 "Animal Management, preparation and sacrifice: reconstructing burial 6 at the Moon Pyramid, Teotihuacan, México". *Anthropozoologica* 48 (2), pp.467-485.

Sugiyama, Saburo

2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press.

Suzuki, Shintaro, Vela Tiesler y Seiichi Nakamura

2013 "Nueva estrategia en la estimación de la edad a la muerte: Aplicación histomorfológica en la arqueología de las Tierras Bajas Mayas y un estudio de caso del sitio arqueológico de Copán, Honduras". *Estudios de Antropología Biológica* 14, pp.153-169.

Tsukamoto, Kenichiro

2014 "Multiple Identities on the Plazas: The Classic Maya Center of El Palmar". In *Mesoamerican Plazas: Areas of Community and Power*, edited by Tsukamoto, Kenichiro and Takeshi Inomata, pp.50-67. University of Arizona Press, Tuscon.

Tsukamoto, Kenichiro and Javier López

2011 "Discovery of a Hieroglyphic Stairway at El Palmar, Campeche, Mexico". *Mexicon* XXXIII, pp.60-61.